

## マーガレット・ドラブル試論 (2)

### —『黄金のイエルサレム』における 母娘の葛藤と自己認識のテーマ—

鈴木 万里

英国の小説家マーガレット・ドラブルは、日常的な場面を丹念に描きながら、人間の自己認識という伝統的で普遍的な主題を扱った長編小説を 60 年代から現在に至るまで次々と発表している。前回、その第一作『夏の鳥籠』の主人公セアラ・ベネットの生き方を通して、一見、自由を謳歌しているようでありながらも、実は、生きる定型を喪失してしまった現代において、各個人が独力で自分の生き方を見出すことが如何に困難であるかを検証した。大学卒業後のセアラの戸惑いと「したいことがたくさんある。」「何をすべきか分からない。」という思いは、恐らく現代の若い世代の多くが心の奥に抱えている不安や苛立ちと根源的に同質のものであろう。そしてセアラの閉塞的な状況の打開に繋り得るひとつの糸口として、女優ヘスタとその幼い子供の存在を指摘しておいた。初対面の母子の姿がセアラに強い感銘を与えたのは、社会を構成する最も基本的な繋りである親子の関係の原形をそこに見出したためであろう。それは、いわば、社会の構成員となることを、いつまでも遅らせることによって、回避してきたセアラとは対極に位置する存在であるがゆえに、一層鮮明な驚きと感動を与えたに違いない。

ドラブルの作品世界の中で、親子の関わりという問題は極めて重要な位置を占めていると考えられる。何故なら 1988 年までに 10 冊を数える長編小説は、いずれも何らかの形で親子間の様々な軋轢を含んでいるからである。とりわけ第 4 作に当たる『黄金のイエルサレム』は、母娘の激しい対立と葛藤が痛ましい形で語られ、主人公の自己認識と内的成長の過程が最も鮮烈に描かれている。本稿では、この作品における主人公の心の遍歴を辿りながら、ドラブルが拘り続けている親子の関わりとはどのようなものであるかを探り、彼女の小説世界を読み解く手掛かりとしたい。

『黄金のイエルサレム』の主人公クララ・モームは、ドラブルの創造する人

物像に特有の様々な属性や特徴を担っている。ロンドンで大学生活を送っているクララは、故郷であるヨークシャーの町ノーサムとそこに住む母親に対して、激しい反発と嫌悪感を抱いている。概してドラブルの小説の主人公たちは殆どが、その出身地や生い立ち、両親など自分の出発点に関わる状況を否定的に捉えていることは極めて注目すべき点であると考えられる。故郷は、懐しく思い出す地ではなく、常にそこから逃げ出すべき忌まわしい連想を伴う場であり、両親は慈愛に満ちた保護者というより、偏狭で独善的な価値観を体現している管理者として批判の対象となっていることが多い。従って、そこから何とかして脱出しようとする解放への強い希求が、主人公たちの心理には常に働いている。クララにとって故郷は不毛のイメージそのものであり、休暇で帰るたびに激しい孤独感と夜も眠れぬほどの神経症的な恐怖感に身を震わせ、いくら前に進んでもまた引き戻されてしまうような挫折感に襲われている。彼女を苦しめているのは、結局この町から逃げ出せないのではないか、いずれ力尽きてここに帰って来ざるを得なくなるのかもしれない、やがてまた自分も母と同様に喜びのない一生を送ることになりかねない、という言い知れぬ不安と焦燥である。そして抵抗を試みる気にもなれずに、何週間もじっと家に籠って新学期が始まるのをしょう然と待つ他になすすべをもたない。卒業後の進路も決めかねていて、家に帰ることだけは絶対に避けたいと思いつつもその手立てが見出せずに思い悩み、一体母は何故自分に帰ってもらいたいのだろうと訝る。このようにクララは故郷に纏わるあらゆる想念を徹底的に恐れ憎んでいるのだが、一方で自らの内に故郷を切り捨てられない何かがあることにも気づいている。自分は自由なのだと言い聞かせつつもノーサムを永久に離れる勇気がないことを認めずにはいられない彼女は、それを母に対する義務感や自己犠牲のためではないかと密かに恐れている。しかし、故郷や母を見捨てられないのは、実はそれらが、彼女自身と同質であり分かち難く結び付いているためなのである。

クララという人間の内部ではふたつの相反する力が激しく闘ぎあっている。ひとつは母親の生き方に集約されるような禁欲的で閉鎖的かつ堅実な価値観に基づく志向であり、もうひとつは自由奔放な輝かしい愛と喜びの人生を追い求める心情である。この矛盾する性向のために、クララは何事に対しても単純な割りきり方をすることができず、否定しながらも心の底では受け入れていたり、賞賛しつつも批判的な視線を向けたり、強く求める一方で既に諦めているといった複雑な反応を示す。彼女が子供の頃に読んで最も興味深く感じた「二本の雑草」という物語は、人生における対照的な二つの価値

観を提示している。

...In this tale, two weeds grew on a river bank ; one of them conserved its energy, and grew low and small and brown, with its sights set on a long life, while the other put forth all its strength into growing tall and into colouring itself a beautiful green. During the summer, these two weeds reviled each other, as fabulous creatures will ; the lowly weed accused its brother of grandiose, spendthrift ambitions, and the tall weed called the low weed mean and miserly. At the end of the summer, a beautiful girl passed, and she saw the tall weed, and plucked it and put it in her dress, where it blushed a glorious red and died content ; the weed on the bank saw it die, and laughed, and reflected that it would live till the next year. And it did. <sup>(1)</sup>

——川岸に二本の草が生えている。一本は長生きを目指してエネルギーを節約して低く目立たぬ草になり、もう一本は全力を尽くして高く鮮やかな草になって、夏の間はお互いに罵り合う。夏の終わりに通りがかりの美しい少女が高く伸びた草を摘んで服に飾るとその草は満足して死ぬ。背の低い草はそれを見て笑い、次の年まで生き伸びる。——この寓話が印象深かったのは、一方的な道德観を強制することなく、両義的な解釈を許す可能性を含んでいたためである。それはクララ自身の内に共存する二面的な傾向を表わし、時にはそれが極めて屈折した心理へと繋っている。

彼女は人生のあらゆる立脚点を、妥協点の見出せない頑迷な母親との敵対関係に置いているために、稀に母が寛大な態度で優しさやいたわりを示してくれる機会に接すると、自分のこれまでの考え方、感じ方を根底から覆される思いがして、激しく動揺してしまう。例えば、学校時代にパリ旅行の計画を切り出せずにさんざん思い悩んだ末、恐る恐る相談をもちかけると、予想に反して母はあっさり同意してくれる<sup>(2)</sup>。それまで、喜びとは無縁の重苦しい家庭の犠牲者であることに唯一の存在意義と暗い自己満足を見出していたクララは、それすら母の気紛れによって奪われてしまったことに憤りながらも、母との生活の耐え難さは自分にも責任の一端があるのではないかとひそかに危惧せざるを得ない。彼女にとって母親は自らの内なる否定的な側面をすべて引き受けてくれるという意味で自己正当化に不可欠の存在である。従って母との間に共感する部分を見出すことは存在原理を揺るがす深刻な事態とな

り得るのだ。しかし同時に、母親の価値観はクララの中に厳然と根付いているので、故郷を離れて都会で新しい魅惑的な体験をするたびに、母親ならば一体どう思うことだろうと、常にこれまで反発してきたはずの旧弊な判断基準によって、批判と羨望の相半ばした複雑な反応を示すことになる。

ロンドンで大学生活を送るうちに知り合うようになったクレリア・デナムとその一家はクララが渴望しつつも決して手に入れることのできなかった世界をまさに体現している。洗練された雰囲気、知性と教養、家族同士のあふれるばかりの愛情と讃美は、彼女を圧倒し、夢中にさせる。これまで父親や母親、赤ん坊は退屈な単調さの象徴としか映らず、姉妹とは憎み軽蔑し合うものと考えていたのだが、デナム家に接してクララはこれまでの常識を根底から覆される思いに囚われ、自分は人生の他の関係についても見誤っていたのかもしれないとまで考える。この一家との友情は新しい輝かしい世界への道を開いてくれるものだった。そんなクララが、クレリアの妻子ある兄ガブリエルとの恋愛関係に入るのは当然であり、むしろ出会う前から恋していたとも言えよう。

ドラブルの描く主人公が異性に恋愛感情を抱くきっかけは、生育環境や価値観の相違であることが多い。つまり、まず相手の人間性に共感して心を引かれるのではなく、自分との異質性に魅せられるのである。それだけ主人公が自己否定的な傾向ないしは強い自意識をもっているということも示している。クララの場合もそれまでクレリアに対して抱いていた憧れと羨望をそのままガブリエルに移し替えて、のめり込んでいく。この兄妹は、その容貌、資質、愛情の強さなどあらゆる面で分かち難く結び付いているため、クララがこの新しく見出した恋人によって体験する様々な出来事は、クレリアに導かれて知った世界と同質でありその延長上に位置している。にもかかわらず、ガブリエルの身边には、妹には見られなかった微かな影が纏わっている。驚くほど雑然として汚い家に平然と恋人を連れて帰る不可解な心理や、夫に全く無関心で神経症的な妻の存在は、完璧な理想を体現していると見えたデナム家の世界の裏側にある大きな歪を思わせる。クララとガブリエルの関係を形作っているのは、我を忘れるような恋愛感情ではなく、むしろ、お互いの存在を通じて自分には手の届かない何かを必死に取り戻そうとする執着である。そしてふたりとも相手そのものではなく、より間接的な必要性ゆえにお互いを求めていることを冷静に見通している。しかも、そのような言わば共犯関係こそが恋愛以上に正当で必然的な結び付きであると考えているようですらある。ドラブルの主人公の多くが異質な雰囲気をもつ異性との接触によ

って自己認識を深めていくように、クララもまたガブリエルとの関係を通じて自分について多くを学んでいく。

母の病気を口実にしてふたりで秘かに出掛けたパリ旅行は、その頂点とも言える体験であるが、学校時代のパリ旅行と同様にクララの意識の中では、母の犠牲のもとに実現していること、罪悪感と後ろめたい喜びという屈折した感情に裏打ちされていることに注目すべきであろう。クララの行動や心理の背後には常に母親の姿が隠れていて、遠く離れようとすればするほど、強くその存在を意識せざるを得ないのである。それを彼女は次のような言葉で語っている。

... 'I am chased, I am pursued, I run and run, but I will never get away, the apple does not fall far from the tree,' she said. <sup>(3)</sup>

クララはこのパリ旅行によって今まで育んでくれた木から自分を切り離したいと思っているに違いない。しかし同時にたとえ望み通りに木から離れることができたとしても、それほど遠くない場所に落ちるであろう自分の運命をも予測しているように見える。そして、次のように、ガブリエルに打ち明ける。

... 'Yes, I am all nerve, I am hard, there is no love in me, I am too full of will to love.' <sup>(4)</sup>

彼女は、自分が必要としていたのはひとりの男性という人間そのものではなく、その人を通じて他のものの見方、他の存在形態の感覚を求めている、即ち自己解放の手段として異質の存在を必要としていたのだと悟る。更にはデナム家の家族がお互いに恋してまるで近親相姦のようだと指摘する冷静な判断を見せている。一方、ガブリエルは、結婚した途端に妹が居ないことが寂しいと分かったと告白し、クレリアを讃美する。そして、家族間の緊密な愛情から逃れるために黄金の巣から自ら出て行って、頭が変になった姉アミリアの話をする。クララは、お互いのことを考え合う素晴らしい身内のいるガブリエルを羨ましいと言う。しかし、彼もまたクララとは別の意味で、家族の呪縛によってがんじがらめになっていること、デナム家の世界には他人の入り込む隙はないことを無意識のうちに悟ったのではなかろうか。無理に入ろうとすればガブリエルの妻フィリパのように打ちひしがれて惨めな状況に陥るか、或は全く無関心な態度をとるしかないであろう。パリを離れる日にクララが眠っているガブリエルを起こさずに一人で帰るのは、彼女が考えているように自己を捨てて人を愛せるようになった証拠ではなく、彼もまた

同じように人生において深く傷ついていること、彼女にはそれを癒す術がないこと、そして、自己解放を他人に頼ることが如何に不毛であるかに気づいたからではなからうか。

...For to renounce is to value. <sup>(5)</sup>

この「断念することこそが評価すること。」という逆説的な表現は、これまでの執着を捨てることによってそれを越える可能性を示唆していると考えられよう。

ひとりでロンドンに戻る時のクララは、過去の心配症の自分と永久に決別できたというつかの間の解放感を味わって満足する。

...And she felt, ... that she had perhaps done to herself what she had been trying for years to do to herself: she had cut herself off forever, and she could drift now, a flower cut off from its root, or a seed perhaps, an airy seed dislodged, she could drift now without fear of settling ever again upon the earth. <sup>(6)</sup>

彼女は、かつてない解放感に満たされると同時に、ここでも特有の二面的性質によって、ある種の危険性を察知しているように思われる。自由を手に入れるイメージが、根から切り離された花や大地に落ちることのない種子という、不毛で死に繋がる比喻を用いて描かれている点に注目したい。クララは今まで渴望してきた自由が、自己の否定、即ち死を意味し得ることに気づき始めているのである。むしろ、彼女の性質から推測すれば、それが自己の存続を脅かすものであるが故に、より一層解放を熱望していたと言う方が適切であるかもしれない。

ところが、ロンドンに帰ったクララを待っていたのは、母の重病を知らせる電報であった。それを見た瞬間、自分が母を殺してしまった、母の死を願うことで殺してしまった、とまるで天罰を受けたかのように感じる。

...She stood there, ...and her first thought was, I have killed my mother. By willing her death, I have killed her. By taking her name in vain, I have killed her. She thought, let them tell me no more that we are free, we cannot draw a breath without guilt, for my freedom she dies. And she felt closing in upon her, relentlessly, the hard and narrow clutch of retribution, those iron fingers which she had tried, so wilfully, so desperately to elude: a whole

system was after her, and she the final victim, the last sacrifice,  
the shuddering product merely of her past. <sup>(7)</sup>

母の存在は彼女にとって最大の枷であり、その消滅を何より願っているのだが、一方で、母親はクララの人生におけるマイナス面をすべて転嫁し得る不可欠の要素でもあり、内心その死を秘かに怖れているのである。自分の自由と引き換えに母が死ぬのならば、人間に自由などあり得ないし、罪なくして生きることも不可能であると考えるクララは、母親という桎梏を断つことは永久にできないことを既に悟っているはずである。

久しぶりに故郷に戻ったクララは、初めて我が家で一人きりになって、今までやり切れぬ思いで眺めてきた様々な身の回りの品と再び向かい合う。そして、これから本格的な自己探究の旅をする、即ち、自らの内面へと深く降りて行き、これまで直視することのできなかった自分自身と対面することになるのである。まず母親の部屋に入り、母の鏡に映った自分の姿を見てから、小さな容器や箱や引出しなどを次々と開いて、自分でもよくわからない何かを必死に捜し続ける。

...and finally she wandered into her mother's bedroom, and stood there in its emptiness, staring, bemused, at the satin-covered bed. And she felt, as she stood there, that she was facing the room for the first time, no longer averting her own eyes from her own shame before it, no longer blind with vicarious grief, no longer clouded by the menace of her own lack of love. ...and then she went and sat down at the dressing table, and looked at herself in her mother's mirror. Then she started, methodically, assiduously, to open all the little pots and boxes, gazing earnestly at rings and hairpins, at bits of cotton wool and old bus tickets, and then she moved on, to the drawers themselves, to piles of stockings and handkerchiefs, still searching, looking anxiously for she knew not what, for some small white powdery bones, for some ghost of departed life. And in the bottom drawer, beneath a bundle of underwear, she found it. She found some old exercise books, and some photographs done up with a rubber band. <sup>(8)</sup>

ここで「白骨か亡き人の亡霊」という例えが使われていることは、彼女が母の過去における何らかの秘密の存在を確信していることを窺わせる。そして、

最下段の引出しの中に見つけ出したのは、古い練習帳と写真の束であった。クララは、母の娘時代の写真に、これまで一度も目にしたことのないほど明るく希望に満ちた優しい表情を見出して驚愕する。更に、練習帳に記された詩を読んで、母もまた、彼女と同様に昔は輝かしい世界を求め期待に満ちた日々を過ごしていたことを知るに至って激しく動揺する。

O let us seek a brighter world  
Where darkness plays no part :  
and another started with the verse :  
I wait here for my life, and here I must wait  
While all the world rolls on and passes by :  
Surely my expectations have a date,  
And I will find the answer ere I die ?

And Clara, reading this, started to shiver, for she knew that she was reading her mother's life, and that if ever she had needed proof that she had once lived, then this was it. And she turned to the end of the book, and there was the date, 1925 ; before her mother's marriage, before the end of her hopes. And Clara began to cry, for she could not bear the thought of so much deception, of so much disappointment, of a life so eked and spent and drawn and withered away. She would have preferred to believe that hope had never existed, that there had been no error, no waste, no loss, and yet there it lay, in those faded stilted phrases, in those tenuous and stiffened smiles. It was possible, then, to go disastrously astray ; tragedy was possible, survival was no certainty, there was no reason why anyone should escape. <sup>(9)</sup>

クララにとって母は自分とは対極に位置する存在でなくてはならなかった。昔の母が、現在の自分と同じように希望を抱いて明るい世界に憧れ、しかも、その後の人生においてあらゆる期待を次々に打ち碎かれ、諦めと挫折と敗残の年月を空しく送って衰弱して死に瀕していると考えるのは、到底耐えられなかったのである。悲劇は起こり得ること、誰でも逃れられるわけではないことをクララは知った。そしてそれがまさに母の人生に起こったことも。しかし皮肉にも、この衝撃こそがクララに自己認識を促し、解放をもたらすのである。



...and as she fell asleep she noticed in herself a sense of shocked relief, for she was glad to have found her place of birth, she was glad that she had however miserably pre-existed, she felt, for the first time, the satisfaction of her true descent. <sup>(10)</sup>

クララが熱望していた解放とは、母を否定し切り捨てることによって達成されるものでは決してなく、むしろ、母の存在を自らの内に認めて、その母娘の夢と現実を知ることによって初めて実現されるものであった。いわば、彼女は今まで母親を拒否することによって、解放を願いながらも、間接的に自分自身を否定し拒絶してきたのである。ここで、母との連続性を発見しその存在を受け入れたからこそ、翌晩、自分があと一週間しか生きられない、したいことがたくさんあるのに、まだ死ぬわけにはいかないと叫んでいる夢を見るのである。クララは、これまでの反発と憎しみを捨てて母を許したのみならず、その失意の人生における幻滅、悲しみ、無念さ、諦めをも理解するまでに至ったのである。ここで初めて母への共感を見出したからこそ、入院中の母を見舞っても却って打ち解けることができない。むしろ母が自分に感情を見せるのではないかとひどく恐れてしまう。この場面でクララはかつてないほど母の存在に近づいているといえるであろう。

ようやく母の呪縛から解き放たれたクララは、同時に、今まで重苦しく心にわだかまっていた故郷の町ノーサムの悪夢からも自由になったことに気づく。

...Clara, ...suddenly wondered if her whole vision of Northam might not after all have been a nightmare, and that the whole city might have been filled with warm preoccupations, a whole kind city shut to her alone, distorted in her eyes alone. And she felt once more charitably towards herself, that she had had no wish to hate ; she had merely wanted to live. <sup>(11)</sup>

クララは、母親や故郷に対する偏見を捨てたのみならず、これまでの自らの生き方を「憎もうと思ったのではなく、ただ生きたかったのだ。」と分析する冷静さをも見せている。彼女がこの帰郷によって得たのは、自分が生れ育った家から自由にはなれない、それは永久に自分の一部なのだという認識であった。しかし逆説的ではあるが、この認識に達した時、クララは初めて自らの偏見と憎しみから解放されたとと言えるであろう。恋人のガブリエルは、彼女にとって向上の手段でしかなかった。自己解放への道は、外の世界に脱出

することによってではなく、自分自身と向かい合うこと、そして直視に耐えない自己を受け入れることによってこそ、開かれるものであるに違いない。この小説は、母が死にかけていても、自分は生き抜いてみせる、捕まってなるものか、というクララの生への挑戦的な決意で締め括られている。

...Her mother was dying, but she herself would survive it, she would survive even the guilt and convenience and grief of her mother's death, she would survive because she had willed herself to survive, because she did not have it in her to die. Even the mercy and kindness of destiny she would survive; they would not get her that way, they would not get her at all. <sup>(12)</sup>

これは、かつての現実逃避的な願望とは異なり、母親の失意の人生とその悲しみを理解することによって、自らの拠り所を見出したクララが到達したひとつの結論であったに違いない。この小説では、母親の死も、母娘の和解の場面も描かれてはいない。クララの体験はすべて内なる認識のレベルにおけるものなのである。

興味深いことに、このクララの体験は、彼女が幼い頃に読んで印象に残った寓話のひとつに象徴的に描かれている。

...But her favourite was a book called The Golden Windows, ... the title story told, ...of a little boy who saw from a hillside while out walking a house whose windows were all of gold. He searched for this wonderful house, but could not find it, and was returning home disappointed when he realized that the house was his own house, and that the gold was merely the reflection of the sun. The moral of this story, was, she assumed, that one must see the beauty in what one has, and not search for it elsewhere; but it carried with it, inseparably, the real sadness of the fading windows, and the fact that those within the house could never see them shine. <sup>(13)</sup>

彼女の自己探究の旅も、外へと求めるべきものではなく、むしろ個人の内部へと向かうはずのものであった。クララの遍歴は、故郷から遠ざかろうとすればするほど、母の「最下段の引出し」に向かって求心的に引き寄せられて行く。母親の部屋の一番下の引き出しの中の下着の束の下とは、心の最も内奥の秘密の場所であり、そこには、過去、現在、未来が凝縮されている。バ

シュラールによれば「戸棚とその棚、書物机とその抽出、箱とその二重の底は、秘密の心理生活の真の器官である。」<sup>(14)</sup>という。クララは、その秘密を探り当てるために、一人で立ち向かい、一心に何かを捜し出そうとする。この時点では、彼女は何を求めているのか自分でもわかってはいない。これは、自己の深層に横たわる生の秘密の領域を探ろうとする内的な体験であるために、他の人間は一切排除されている。そこで見出されるのは、母親のかつての生の証とも言える個人的な記録であるが、クララにとってそれは、現在と過去との測り知れない断絶を繋ぐ唯一の絆となり得る。母親像あるいは故郷で過ごした日々は、自らの内の最も否定したい部分を体現している。自分の生い立ちや偏狭な環境、独善的な価値観から、自らを切り離して解放されることを強く希求してきた彼女は、今まで反発し嫌悪し逃れたいと願ってやまなかったものとの密接な繋りを、自己の中に見出すことによって、切り捨てることのできない自分自身に気づき、自己の存在をようやく許せるようになったと言えるであろう。

ジョアン・V・クリートンは、ドラブルの小説の出発点を「自分の場所を探すこと」と述べている<sup>(15)</sup>。引き寄せられるように母親の鏡台に向かい合い、その引出しの中を探ったクララは、究極的には自分自身の場所を探していたに違いない。そして、そこで、彼女は過去と和解する。母親の夢、苦悩や悲しみを知ることで、痛みをもって過去を受け入れることを学ぶのである。

リン・V・サドラーによれば、「過去を受容すること」がドラブルの主なテーマであるという<sup>(16)</sup>。ここで、この過去を受容が、母親の死を契機としてのみ可能となっていることに注目したい。クララは、若き日の夢や希望について母に尋ねてみようとは決してしない。親娘の間には越え難い深淵が横たわっており、対話は初めから断念されている。この関係を修復し得る唯一の機会が母親の死であるとは何とも痛ましい結論ではある。母という存在を失うことによって、クララは、自らの内面でも死を経験し、かつては見えなかったものが見えてきて、新たな生へと繋っていく、という意味で、これは、個人の内的体験における死と再生を描いているとも考えられよう。彼女は自己探究の旅を続けて、母の死という大きな代償と引き換えに自分自身と和解するに至るのである。即ち、過去を辿り自分の原点を見極めることは、これからの生き方を探るうえで不可欠の行為なのである。ここから、文学における伝統を重視し、受け継ごうとする作者ドラブルの姿勢を類推することは、それほど見当違いではなかろう。伝統という、過去から連綿と続いてきた価値

を見極め、これを受容することは、単に過去の砦を死守することではなく、現在置かれている状況を認識し、前に踏み出すために必要な唯一の方法と考えられているに違いない。

現代社会はあまりに複雑化、細分化されており、個人の視野ではもはや把握することは到底不可能である。周囲の世界との有機的な繋りを見出せない我々にとって、いま一度自分が何であるかを足許から見詰め、自分の生きる基盤を確認し、自己を再認識することは、この無定形な空間の中で、ささやかな生の場所を捜し出そうとするためのひとつの試みと言えるであろう。

ドラブルの小説は、人間の生に伴う不可避的な葛藤を扱っている。登場人物は、自分の属する世界と、憧れる異質な世界との強い引力に晒され、常に分裂した状態にある。これは、人間が生れ育った閉ざされた場所と、人間が希求する開かれた場所との矛盾葛藤である。視点を変えれば、それは地方共同体的な文化圏と都市文化との対比であり、また、より拡大し抽象化すれば、自己と他者、あるいは、現実と理想との対立とも考えられるであろう。そして、それらの乖離を僅かなりとも埋めようとする試みが、ドラブルの作品世界の一端を構成しているのである。

#### 注

- (1) Margaret Drabble, *Jerusalem the Golden* (Penguin Books, 1969) p. 34.
- (2) Ibid., pp. 57-59.
- (3), (4) Ibid., p. 165.
- (5) Ibid., p. 187.
- (6) Ibid., p. 189.
- (7) Ibid., p. 191.
- (8) Ibid., pp. 194-195.
- (9) Ibid., p. 196.
- (10) Ibid., pp. 196-197.
- (11) Ibid., p. 201.
- (12) Ibid., p. 206.
- (13) Ibid., pp. 33-34.
- (14) ガストン・バシュラール、『空間の詩学』, 岩村行雄訳, 思潮社, 1969年, 116頁。
- (15) Joanne V. Creighton. *Margaret Drabble*, Methuen, 1985, p. 28.
- (16) Lynn Veach Sadler, *Margaret Drabble*, Twayne, 1986, p. 2.